

第49回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール

石森延男賞 作品

石森延男賞

6年自由図書部門／読んだ本・介護の花子さん

解互の結衣さんになります

山口県周南市立徳山小学校 佐々木結衣

苦しみは糧になる、辛さは価値があるものだ。私は苦しいことや辛いことに直面すると、そう思うことにしている。だが、祖母が骨折して介護が必要になった時は、どうしたら良いか分からなかった。そんな時に出会った本が、介護の花子さんだ。私は、祖母の心に寄り添うにはどうしたらいいか考えていた。

祖母が自転車で転倒し、足を骨折した。手術をする事になり、入院した後しばらくはリハビリと介護が必要になることが分かった。私は祖母が心配になると同時に介護って何だろうと思った。初めて聞く言葉で、何をするか分からない。花さんの勤めるふぁんホームにも入居者の家族がいて、家族は入居者の状況に戸惑っていた。介護は初めて経験することばかりだ。個人差もあるから同じ例はない。住み慣れた家で過ごしたいはずなのに、ふぁんホームのような施設に入所するという事は、家族が家での生活を支援することができないんだろうか。家族はどんな気持ちで施設へ送り出したんだろう。

介護する家族の気持ちがあったのは、祖母が自宅に帰ってからだだった。祖母が退院した時に家族で迎えに行った。車いすに乗り、笑顔のない祖母。こんなに元気がない祖母を見たのは初めてだった。祖母は一人暮らしのため、母は仕事に家事に介護と大忙しだ。

私は少しでも母の助けになりたくて祖母の家に行く母について行った。いつも出来ていた家事が出来なくなっている祖母を見て、私が出来たことは何でも手伝おうと意気込んだ。祖母に喜ばれると思ったが、あまり喜んでいないように見えた。その理由は、花さんが教えてくれた。花さんも私も自分の気持ちが先走り、相手の気持ちを確認せず行動していた。善意であれば良いというわけではなく、一つのができないからといって、全て出来ないわけではなく。出来ることまで取り上げてはいけなかった。何が出来なくて困っているか、手伝って欲しいことは何かを聞くことが本当の意味で祖母の心に寄り添うことだった。私は、自分が祖母の気持ちを聞かず全て手伝ってしまったことが失敗だったと思い、母に話した。母は、家族であるからこそ近すぎて思いが溢れてしまうと教えてくれた。それを聞いて、ふぁんホームの入居者の家族は、思いが溢れて傷つけないように少し離れたんだと思った。大事に思うからこそ離れる、そういう愛の形だったんだ。

それから私は祖母の気持ちに寄り添うために話をして「聴く」ことを心がけた。してほしいこと、嫌なこと、どんなことも聴くようにした。家族との思い出は良いことも悪いことも心を豊かにする。日々のことを話すうちに祖母は

少しずつ元気を取り戻した。リハビリが始まって辛くないか聞いた時、
「苦しみは糧になる、辛さは価値があるものだよ。」

今の私を支える言葉は、祖母が私に教えてくれた言葉だったと思いい出した。祖母と私は同じ思いで、心がつながっている。
私が一番心に残ったのは、ふぁんホームで亡くなった大久保八重さんの話だ。死を前向きに受け入れて皆で支えることは信頼し合った仲間でないといけない。死に向かう姿を見守るのは、悲しく辛い出来事が続くからだ。八重さん、八重さんの家族、ふぁんホームで働く人、入居者皆がチーム一丸となって八重さんを見送ったチームプレイだった。この本を読んで、私は祖母との残りの時間を意識している。今過しているこの時間は私の心も祖母の心も豊かにするはずだ。少しずつ出来なくなることが増える祖母と少しずつ出来るが増える私。支える力が逆になっても、支え合っていることに変わりはない。花さんが「解語の花さんになります。」と言った時、私も互いの心を理解し、心に寄り添う「解互の結衣さん」になりたいと思った。